

〈学会発表渡航支援報告書〉

(フリガナ) 氏名	カンノ ユウカ 菅野 優香	所属 北海道大学大学院文学研究科	
発表題名	Hermeneutic Field: Queer Intimacy in <i>Sound of the Mountain</i> (1954)		
会議名	The 9th International Conference <i>Crossroads in Cultural Studies</i>		
開催地	パリ (フランス)	参加期間	2012年 7月 5日
<p>報告者は、2012年7月2日から6日にかけてフランスのパリで開催されたカルチュラル・スタディーズ学会主催による第9回「クロスロード会議」に参加し、発表を行った。二年に一度開かれるクロスロード会議であるが、今回は国、世界各地から1,400名あまりの研究者が集まる極めて大規模な学会となった。</p> <p>後援にはパリのソルボンヌ・ヌーヴェル大学と同時にユネスコが名を連ねているが、文化の多様性と差異を重んじるカルチュラル・スタディーズとユネスコとは、当初から緊密な協力関係にあるのだという。英語圏、とりわけイギリスにおいて学問的発展を見たカルチュラル・スタディーズが、フランスをはじめとするヨーロッパ圏で可視性と存在感をアピールするために、あえてパリという一見、「カルスタ」には馴染みにない場所が選定されたようである。文化の多様性と差異を大切にするカルチュラル・スタディーズではあるが、クロスロードの狙いは、イギリス、アメリカを中心とする英語圏の研究者だけでなく、より広い地域から、さらに多種多様なテーマ、アイデアを取り込み、一層の多様性をもたらそうとするとところにある。そうした狙いに相応しく、今回の会議でも様々な地域から来た研究者たちが、様々な文化的問題について、盛んに議論し、意見や情報、知識の交換を活発に行っていた。</p> <p>報告者は他の二人のメンバーとともに7月5日のセッション：<i>Returning to Queer Readings of Japan</i>に参加し、<i>Hermeneutic Field: Queer Intimacy in Sound of the Mountain</i> (1954)と題する発表を行った。成瀬巳喜男監督による映画作品『山の音』(1954)を取り上げ、この作品に描かれた女性の友愛、親密性、および共同体の在り方を、敗戦後の日本という社会的、歴史的視座から検討した。パンパンや復員兵などとともに「戦争未亡人」は日本の戦後を象徴する映画のイメージのひとつとなったが、本報告では、この作品に表象された戦争未亡人の分析を通して、コアプロジェクトのテーマ「戦後セクシュアリティと親密性の再編」にアプローチし、女性達によって構築されたオルタナティブな親密圏について考察した。他の二人のメンバーは現代日本のクィアネスについて発表したが、戦後間もなく作られた映画テキストの「クィア」と社会問題、文化的現状における「クィア」を繋げるような質問もあり、有意義な議論ができたと思っている。</p>			

